

国立国会図書館



新春対談 彫刻家 澄川喜一氏をお迎えして
日本の文化力再発見
古典籍の世界へ

2011.1
No. 598

国立国会図書館利用案内

東京本館

所在地 〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話番号 03(3581)2331
利用案内 03(3506)3300(音声サービス)
03(3506)3301(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和洋の図書、和雑誌、洋雑誌(年刊誌、モノグラフシリーズの一部)、和洋の新聞、各専門室資料

サービス時間

開館時間	月～金曜日 9:30～19:00 土曜日 9:30～17:00	即日複写受付	月～金曜日 10:00～18:00 土曜日 10:00～16:00
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室、古典籍資料室の開室時間は17:00までです。</small>	後日複写受付	月～金曜日 10:00～18:30 土曜日 10:00～16:30
資料請求時間	月～金曜日 9:30～18:00 土曜日 9:30～16:00	オンライン複写受付	月～金曜日 10:00～17:30 土曜日 10:00～15:30
	<small>※ただし、音楽・映像資料室、憲政資料室および古典籍資料室の資料請求時間は16:00までです。</small>		

■見学のお申込み／国立国会図書館 資料提供部 利用者サービス企画課 03(3581)2331 内線26111

関西館

所在地 〒619-0287 京都府相楽郡精華町精華台8-1-3
電話番号 0774(98)1200(音声サービス)
利用案内 0774(98)1212(FAXサービス)
ホームページ <http://www.ndl.go.jp/>
利用できる人 満18歳以上の方
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 日曜日、国民の祝日・休日、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
おもな資料 和図書・和雑誌・新聞の一部、洋雑誌、アジア言語資料・アジア関係資料(図書、雑誌、新聞)、科学技術関係資料、文部科学省科学研究費補助金研究成果報告書、博士論文

サービス時間

開館時間	月～土曜日 10:00～18:00	即日複写受付	月～土曜日 10:00～17:00
資料請求時間	月～土曜日 10:00～17:15	後日複写受付	月～土曜日 10:00～17:45
セルフ複写受付	月～土曜日 10:00～17:30	オンライン複写受付	月～土曜日 10:00～17:00

■見学のお申込み／国立国会図書館関西館 総務課 0774(98)1224 [直通]

国際子ども図書館

所在地 〒110-0007 東京都台東区上野公園12-49
電話番号 03(3827)2053
利用案内 03(3827)2069(音声サービス)
ホームページ <http://www.kodomo.go.jp/>
利用できる人 どなたでも利用できます(ただし第一・第二資料室は満18歳以上の方)。
資料の利用 館内利用のみ。館外への帯出はできません。
休館日 月曜日、国民の祝日・休日(5月5日こどもの日は開館)、年末年始、資料整理休館日(第3水曜日)
※第一・第二資料室は、休館日のほか日曜日に休室します。メディアふれあいコーナーと本のミュージアムは、行事等のため休室することがあります。
おもな資料 国内外の児童図書・児童雑誌、児童書関連資料

サービス時間

開館時間	火～日曜日 9:30～17:00	<small>※1階子どものへや、世界を知るへやおよび3階メディアふれあいコーナー、本のミュージアムの利用時間は、開館時間と同じく9:30～17:00です。</small>	
第一・第二資料室の利用時間	閲覧時間	火～土曜日 9:30～17:00	資料請求時間 火～土曜日 9:30～16:30
複写サービス時間	即日複写受付	火～日曜日 10:00～16:00	後日複写受付 火～日曜日 10:00～16:30
	複写製品引渡し	火～日曜日 10:30～12:00 13:00～16:30	

■見学のお申込み／国立国会図書館国際子ども図書館 03(3827)2053 [代表]

C O N T E N T S

02 金太郎蔵開絵 新年を寿ぎ、子どもの出世と健康を願って
今月の一冊 国立国会図書館の蔵書から

04 新春対談
彫刻家、東京藝術大学名誉教授・顧問 澄川喜一氏
国立国会図書館長 長尾真
日本の文化力再発見

12 言葉のエッセイ 第1回 表記と発音

14 古典籍の世界へ

13 館内スコープ

ホームページと過ごす日々

26 本屋にない本

○『映像アーカイブのノート』

27 ND L NEWS

- 中国国家図書館との第29回業務交流
- 平成22年度国立国会図書館長と行政・司法各部門
支部図書館長との懇談会
- 平成22年度国立国会図書館長と大学図書館長との
懇談会
- 平成22年度書誌調整連絡会議
- 法規の制定

29 お知らせ

- 近代デジタルライブラリーで児童書も利用できます
- 国際子ども図書館展示会「日本の子どもの文学—
国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」
- 国際子ども図書館春休み催物「子どものための絵本
と音楽の会」
- 平成22年度利用者アンケートの結果を公表しました
- 関西館小展示（第7回）「テレビジョン—アナログから
デジタルへ—」
- 資料保存特別研修「図書館・文書館におけるマイクロ
フィルム・写真の取扱いと保存」
- 新刊案内 国立国会図書館の編集・刊行物

36 新年のごあいさつ 今年の課題

金太郎蔵開絵 新年を寿ぎ、子どもの出世と健康を願って

伊藤 りさ

今月ご紹介するのは、一月にふさわしく鏡開の絵である(写真1)。たまさかりを持った金太郎の前には立派な鏡餅があり、傍らでは母の山姥が目を細めて金太郎を見つめている。背後には兜の飾られた具足櫃ぐそくびつも見える。

画中には「くら美良喜びらき」(蔵開)とある。蔵開は、新年に吉日を選び、その年はじめて蔵を開く行事で、商家で盛んに行われた。武家ではこの日を具足開として、武具甲冑に供えた餅を割って食べた。具足餅は刃物を忌んで手や木槌で割るものだともいわれるが、本作で金太郎がたまさかりをふるって餅を割っているのは、たまさかりをトレードマークとした金太郎ゆえだろう。

江戸時代半ばから、金太郎と山姥は浮世絵の題材としてしばしば取り上げられるようになる。特に、喜多川歌麿は、それまでグロテスクな老鬼女の姿で描かれることの多かった山姥を、弊衣蓬髪へいいほうはつではあるものの若く美しい女性として表現してエポックを画した。本作の絵師、月岡芳年も金太郎はお気に入りの題材だったのか、兎と猿の相撲を見守る姿(「月百姿 金時山の月」写真2)など、伝統的な金太郎のモチーフを繰り返し描いている。

一方、本作の金太郎を見て、見慣れた「金太郎」の姿とはいささか趣が異なると感じた方も多いのではなかろうか。例えば、まさかりとともにもう一つのトレードマークともいうべき金の字の腹がけをしていない。金太郎は大概、腹がけか童子格子の着物を着ているものだが、本作の金太郎は立派な装束に身を固めている。彼が腹がけの代わりに身につけているのは、両袖に大きく「金」と染め抜かれた素襖すおうである。素襖は武家が用いた儀礼服で、略儀ながら晴れの日の装束である。金太郎の正装姿とは意外な気もするが、明治時代初期のお

伽嘶とぎばなしの本などの中で、金太郎が源頼光に見出されて都で頼光にお目見えするといった場面に素襖姿の金太郎が描かれているものが散見される(写真3)。金太郎の絵は、子どもの一年の健康と出世を祈願する意味合いをもつ縁起物だったのではないかと鳥居フミ子氏は指摘しているが、出世した金太郎が素襖を着て力いっぱい鏡餅を割る様子を見せる本作は、そうした子どもの幸せを願う縁起物にふさわしい図柄といえよう。

金太郎の傍らで優しく彼を見つめる山姥も、従来の表現とは異なり、歌舞伎の所作事の「山姥物」の装束で描かれている(写真4)。とはいえ、この絵を芝居の見立て絵とは考えなくてもよいだろう。金太郎の素襖と同じように、新年にふさわしく、華やかで美しい絵面を構成しようということではなかろうか。

金太郎を見つめる山姥の眼差しは、母としての情愛に満ちている。芳年の晩年の作品「風俗三十二相」の中に、「かわゆらしさう」という幼子をあやす母を描いた作(写真5)があるが、その母と本作の山姥の表情はよく似ている。母は、出世した我が子の晴れ姿を誇らしげに見つめているようである。

芳年はとかく「血みどろ絵」「残酷絵」ばかりが目される傾向にあるが、物語や歴史に材を取ったものや、風俗画・美人画なども多く残している。本作は最晩年の優品の一つで、画面から鏡開の晴れやかでうきうきとした雰囲気が漂ってくるとともに、画面からはみ出さんばかりの金太郎の力強さと、彼に対する限りない母の愛情があふれている。見ているこちらにも思わず微笑みがこぼれて元気がわいてくるような、まさに新しい年のはじめを寿ぐことほにふさわしい一品である。

(いとう りさ 総務部総務課)



写真1



写真2



写真4

写真2 「月百姿 金時山の月」(秋山武右工門 明治23 (1890)年 37×27 cm 『月百姿』所収)の金太郎。童子格子の腹がけという、伝統的図案を折衷したような腹掛けをまとい、一心に動物の相撲を見つめる姿は、むっちりとして愛らしい。

<請求記号 寄別2-9-2-2>

写真3 『金太郎一代記』(宮田伊助 明治14 (1881)年 12 cm)に描かれる素襖姿の金太郎。

<マイクロフィッシュ請求記号 YDM102905>

写真4 一陽齋豊国「東内裏花良門」(辻屋安兵衛 嘉永年間 (1848~1854) 26×37 cm 『俳優画帖』所収)

歌舞伎所作事の「山姥物」の集大成ともいわれる「薪荷雪間の市川」は、嘉永元(1848)年、江戸・河原崎座の顔見世狂言「東都内裡花良門」の二番目大切の浄瑠璃として初演された。

<請求記号 本別15-25>

写真5 「風俗三十二相 かわゆらしさう」(網島亀吉 明治21 (1888)年 36×24 cm 『あづまにしきゑ』所収)

<請求記号 本別15-22>



写真3

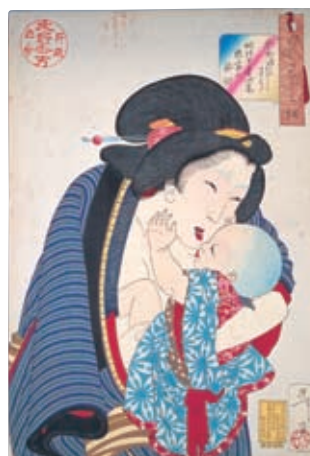


写真5

参考文献

- 鳥居フミ子著『金太郎の誕生』 勉誠出版 2002
- 恵俊彦編著『月岡芳年の世界』 東京書籍 1993
- 日本経済新聞社編『逸品にみる浮世絵250年 松井コレクション』 礒川浮世絵美術館、日本経済新聞社 c1998

金太郎蔵開絵〔月岡〕芳年画

秋山武右工門 明治24 (1891)年 38×26 cm

3枚続き <請求記号 寄別7-5-1-1>

※東京本館所蔵 写真2、4~5とも貴重書画像データベースでご覧になれます

新春対談 日本の文化力再発見

「ものづくりの基本は、
自分の足元をさがしてみろと
いうことですね。」

お客様

彫刻家、東京藝術大学名誉教授・顧問

澄川 喜一 氏



東京スカイツリーのデザイン監修など多方面で活躍されている澄川喜一氏に、新年の展望と、日本の文化政策について、長尾真国立国会図書館長がお話を伺いました。

長尾 きょうはおいでいただきましてありがとうございます。先生がデザインを監修されたスカイツリーは、非常にユニークな建築物ですね。たいへんご苦労だったかと思うのですが。

澄川 私も600mを超すようなものをお手伝いすることになるとは思わなかったですね。東京湾のアクアラインで90mの換気塔をつくるお手伝いをしたんです。海底トンネルの換気施設で、「風の塔」と名付けたんですが、そのデザインを手がけたり、あちこちで野外の彫刻をやっていた関係で、今回スカイツリーにかかわることになりました。

スカイツリーのデザインは、私がテーマにしている「そりのあるかたち」と、「むくり」——日本の木造建築で「起り破風」という、屋根がわずかにふくらんでいる形があるんですが、彫刻でたいへん参考になる、美しい形なんです。その二つの形を入れようということで。

長尾 スカイツリーは、見る角度によって形が変わるそうですね。

澄川 ええ。絵でも彫刻でも魅力がないといけませんよね。私は「不思議」というのが魅力の重要な部分だと思っんです。たとえばピサの斜塔が傾いているような、あれも不思議ですね。スカイツリーの断面は、足元が正三角形で、そりのある形をもたせながら、上は円形になっていますから、ツリーが左右対称に見える場所は3か所しかないんです。見る場所を変えてみると、表情も変わります。

長尾 それは高度な技術が必要ですね。

澄川 この工事ができる溶接技術があるのは日本だけじゃないでしょうか。

長尾 先生の芸術的イメージを形にする技術があるということは、日本もたいしたものですね。

澄川 ものづくりというのは、日本の、いや、日本人のいいところでしょうね。

長尾 このごろのはっきりしない社会の中で、スカイツリーがすかーっとそびえたっていくのを見ると、希望がわいてきますね。

澄川 そうですね。高さは東京タワーの倍ですが、敷地が狭かったものですから、「シンプル イズ ビューティフル」でいこうと考えました。シンプルな美しいかたちを考えると、法隆寺五重塔に行きあたりまして。

長尾 心柱¹を応用しておられるんですね。

澄川 そうです。心柱は日本独特の、聖徳太子の時代からの技術ですが、電算機もクレーンもないときに木造であれだけのものをつくっている。しかもバランスが美しいんですよ。

長尾 スカイツリーは、芸術的コンセプトが先導してつくられているところが素晴らしいと思うんです。芸術と技術のコラボレーションというか。これからの在り方を示唆しているような気がしますね。これまでは技術を優先することが多かったと思うんですが。これは日本の伝統的力と最先端技術の見事な融合ですね。

澄川 そうですね。まず日本独自のものではないと、コピーじゃだめですから。もともと日本の古い建築は芸術と技術が一緒になって、館長のおっしゃるコラボレーションがうまくいっていたんです。古いものの知恵を超えるのはちょっと難しいように思います。

長尾 artという言葉が、もともと「技藝」という意味ですものね。

澄川 「藝」という字には「つくりだす」という意味があるそうですね。農業的なんですよ。

¹ 五重塔など、仏塔の中央部にある柱。耐震効果があるとされる。



Makoto Nagao

1936年生まれ 工学博士
 専門は、自然言語処理、画像処理、パターン認識、電子図書館。
 京都大学工学部電子工学科卒業、京都大学総長（第23代）、独立行政法人情報通信研究機構理事長を経て、2007年4月から国立国会図書館長。

私の問題意識

最近の日本は暗い話ばかりですが、新しい年を迎え、そういったことを吹きとばし自信と希望をもって進んでゆくことが大切であります。そのための根元的な力は日本の伝統、日本人のもつ優れた精神性の自覚から湧き出してくるものと思われまます。したがって日本文化のもつ力、それらの基底を支えている書物、芸術、それらの集積である図書館や博物館といったものについて考えたいと思い、その第一人者である元東京藝術大学学長の澄川喜一先生にお出ましました。先生は彫刻の第一人者であるほかに、最近では東京スカイツリーのデザインをしたことで広く知られて来ている方で、楽しい対談が出来るかと期待しました。

土を耕して種をまいて、愛でて花を咲かせるという字なんだそうです。東京藝術大学も、私が学長のときに「藝」の字を使うようにしたんですよ。

長尾 それは素晴らしい。古来日本では技藝によってものをつくっていたのが、近代になって技と藝が分かれてしまったんですね。スカイツリーをきっかけに、技と藝がまた融合するといいですよ。

澄川 スカイツリーの色は、1年かけて決めたんですよ。いわゆる純白ではなくて、「藍白」といって、白にすこし藍を入れてあるんです。太陽の光が当たると、パイプ構造ですので非常に柔らかい影になるんですが、その影が青く見えるときがあるんです。さらに四季折々の色を考えて、時間をかけて決めているんです。詳しくは秘密なんです（笑）。

長尾 黒川紀章さんが設計した大阪の民族学博物館は利休鼠という灰色ですが、あれもずいぶん考えられたらしいですね。色彩も徹底的に考えると、深い味わいがでてくるんでしょうね。

もうひとつ、日本は空間芸術というんでしょうか、空間の演出のしかたがうまいですね。最近各地に新しい図書館が作られていますが、読書環境としてすてきなものが多いと思います。

澄川 おっしゃるとおりです。読書する場所、それも一人ではなくいろんな人が本を読むような場所については、建築家がずいぶん研究しているようですね。先日、国際教養大学で図書館を見せていただいたんですが、考えられた建築でした。木造を意識した室内で、秋田ですから秋田杉を使っているんですね。閲覧室が階段教室のようになっていて、席に着くと視線の先に人がいないようになってい

るんですよ。

長尾 それはいいですね。

澄川 仕切りはないんです。広い空間の中にいるのに、座ると個人的な空間になる。ちょっと面白いと思いました。それに24時間開館で。

長尾 学長の中嶋嶺雄先生がたいへん熱心ですからね。

読書環境は、読書そのものにも様々な影響を与えるし、本を読みながらいろいろ考えることにも影響を与えますよね。私どものこの図書館も、もっとエレガントというか、落ち着いたいい雰囲気の空間になってほしいと思っていますが、なかなか難しいのです。かなり前のもので、改修ができませんので、絵や書で壁面を飾ったり、何か彫刻を適当なところに置いたりして読書環境をなんとかしてよくしてゆこうと考えています。

澄川 強すぎてもいけないですよ。すぐ自分の世界に入れなきゃいけないし。難しいですね。

長尾 建築も空間の演出を重視する時代になってきているんですね。

ところで、先生の彫刻には木のぬくもりを感じますね。すがすがしくて芯がきりっとしていて、そんな中にぬくもりがある。これは先生独特の境地なんでしょうね。ステンレスのシリーズでもおだやかさというかあったかさが感じられて、不思議ですね。

澄川 いや、まだまだ勉強中ですから（笑）。日本の古い建築、たとえば法隆寺の五重塔なんかには、アイデアのもとがいっぱいあるんですよ。イメージをわかせてくれるタネが。

長尾 日本古来の技術を現代の眼できちっと見直さなくてははいけませんね。

澄川 若いころニューヨークで個展をやった



Kiichi Sumikawa

1931年生まれ 彫刻家

東京藝術大学名誉教授・顧問、東京藝術大学大学美術館評議員、新制作協会会員、日本美術家連盟理事、日本建築美術工芸協会理事、島根県芸術文化センター長、石見美術館館長、横浜市芸術文化振興財団理事長、山口県文化振興財団理事長。

東京藝術大学専攻科修了、東京藝術大学教授、美術学部長を経て、1995年から2001年まで東京藝術大学学長。

2008年度文化功労者に選出、2009年NHK放送文化賞受賞。

2011年12月竣工予定の東京スカイツリーでは、デザイン監修を務める。

澄川

日本の古い建築には、アイデアのもとがいっぱいあるんですよ。

んですが、そのとき「釘をうまく隠してるな」と言われまして（笑）。向こうはわりとバンバン留めちゃうんですね。「全部外せる」と言ったらびっくりしてました。ほんとの木造家屋ははめ込みでしょう。日本独特なんですね。そういうものが、考えるときに刺激をふりかけてくれるというか。先祖は大事にしないといけないですね（笑）。

図書館も、本や環境から刺激を受けてものを考える、イメージをわかせる土壌のようなところですよ。

長尾 そのような図書館空間をつくりたいと思っています。

日本独自といえば、本の世界では、マンガは日本のものが断然人気ですね。

澄川 「MANGA」は世界語ですね。これも、もともとは江戸時代に北斎なんかやっていたものですよ。

長尾 そういう伝統の影響があるんでしょうね。

澄川 説明を少なくして瞬間にぱっと見せるヴィジュアルで、読者にイメージをわかせるんですね。そのかわり、そのヴィジュアルが強すぎると、自分がイメージすることを忘れてしまうんですよ。自分のイメージが入る余地がなくなって、与えられたままで終わってしまう。「面白かった」ということしか残らない。文字を読むときはそれぞれがイメージしますが、マンガは絵がイメージを固定してしまうんですね。ものすごく面白いけど、落とし穴もある。私もマンガは好きでたまに読みますが、そういうことを考えて読者のイメージを刺激している作家が売れているのかなと思うことがありますね。

長尾 藝大も2008年にアニメーションの専攻科をつくりました。これからの世界にマッ

チしていますね。マンガやアニメはますます日本独自のものがでてくるでしょうね。

澄川 スカイツリーでも、国産の技術、日本の職人が協力してすごいものができあがるわけで、もっと日本のすばらしさを総合的に外国にアピールしたほうがいいと思いますね。

長尾 日本がもっている独特の価値を日本人自身が認識して、グローバルに通用するものだけということをはっきりさせていけるといいですよ。

澄川 自信をもって堂々とやっていったらいいですよ。堂々「ドウ」くらいね（笑）。新しい年はこれじゃないでしょうか。

長尾 日本人の精神性というかキャラクターに、日本の良さの根源があるのかなあという気がするんですが。先生の彫刻を見ていると、日本人のもっている、清らかさというか調和を好むというか、そういうものをひたひたと感じます。素人の考えですが。

澄川 それはどうもありがとうございます。

長尾 そういうものをもっと普遍的な価値として世界にアピールしていければいいと思うんです。

澄川 ぜひ若い人が自信をもってやっていけるといい。我々も日本の良さについて言わないといけないですね。私は島根の生まれで神話や神楽に囲まれて育ったんですが、子どもたちの教育に神話を取り入れるといいんじゃないかと思っています。

長尾 私も同じ意見です。

澄川 いま島根県が、「神話の国」として神々に注目しようということで、美術館や博物館などでいろいろやっています。神話を教育に取り入れていないのは日本だけじゃないでしょうか。神話の中に教えがいっぱいあるん

ですよ。

長尾 河合隼雄先生は神話を分析して、日本人の特質がそこから汲みとれるということをおっしゃっていましたね。だから神話を読むことは大切なのです。

私はいま電子図書館をつくろうとしているんですが、日本人がこれまで築き上げてきた知——知識だけでなく、こころを含めて、知を世界に開放していきたいんです。紙の本だと図書館に来ないと読めないけれど、電子化することによって世界中に広めていけるんじゃないかと。芸術の世界にも日本のユニークなものはたくさんありますね。

澄川 ええ、世界に出ていくときは、まず日本の良さを調べたほうがいいと思うんですよ。私は子どもの頃、錦帯橋に興味をもったんですよ。木造の橋の下に石垣が組んであって、その組み方がものすごくきれいなんです。「不思議」の魅力にそこで気がつきました。江戸城の石垣なども、どうやってつくったのか、不思議物語ですよ。そういうすごいものは、日本には調べればきりがなくらいあると思います。もちろん外国にもありますが、ものづくりの基本は、自分の足元をさがしてみろということですね。私が藝大に入ったころは、木彫（彫刻科）に平櫛田中先生がいて、仏像を見ろと。私も若いころはヨーロッパを見てたんですが、（先生の言葉の意味が）すぐわかりましたね。藤田嗣治さんや森英恵さんは、フランスに行って、日本らしさを出して認められました。日本らしさを自然に出すためには、日本についてちょっと勉強したほうがいいですね。我々の仕事は立つ足場がないと、ふわふわしてたらやっていけないんです。

長尾 郷里をもつこと、その土着性が強さに

なるんですね。

澄川 日本はそういう意味で強いと思いますよ。

長尾 これから21世紀の社会を生きていくには、量を増やすだけではなくて、質を大事にするのがいいんじゃないかと考えているんですけどね。あんまり金儲けばかりに走らずにね（笑）。そういうものを文化庁は「文化力」と表現しておられるんでしょうが、その基底を支えるのが図書館だと考えているのです。だから国立国会図書館はもとより、各地の公共図書館をもっと充実してゆくことが大切です。

澄川 国民に文化力がないと、世界に出たときに信用してくれませんね。

長尾 相手も文化力を感じると、風圧になるというか、こちらに一目も二目も置いて遇してくれますね。無言の背景的な力になる。日本人の精神性を大切にすることによって、いろいろなことが活気づいていくのではないのでしょうか。

澄川 いまちょっと沈んだ状態ですよ。これを盛り返すには、みんなが自分本来の良さ、誇りを取り戻すのいいでしょうね。

長尾 そういう意味でスカイツリーは我々にとって希望のシンボルみたいな感じですね。元気を与えてくれるというか。

澄川 あそこに行ったら、下を向いた人も上を向きますから（笑）。2011年12月に竣工して、そのあと周辺にプラネタリウム、水族館、ビルなどをつくる予定です。

これからやるのは、いままでにない工事だそうですね。ゲイン塔²、五重塔でいえば相輪^{そうりん}のように飛び出している部分の中をつくっているんですが、クレーンが設置できないので、

2 デジタル放送用アンテナを取り付ける鉄塔。

澄川

世界に出ていくときは、まず日本の良さを調べたほうがいいと思うんですよ。

長尾
あらゆる資料を集めて、100年200年、もっともっと長い間
残していかなければいけません。

中から押し上げるんです。建築会社がいろいろ工夫して。私は冗談で、これは「神業」だから、スサノオノミコトに頼んで上から引っ張ってもらったら、と言っているんですが（笑）。何もなくて相当の重量のものを上げますから、難工事だと思います。

長尾 現場の方々も、クリエイティブな新しい工法に取り組んでおられるのですね。

澄川 現場が生き生きしているんですよ。すごい総合力ですね。パイプを溶接するのにも、審査で選抜された溶接工が来ているんです。

長尾 スカイツリーができるまでの記録はどうなっているんですか。そういう独特な工法は、後世のために残していただかないと。

澄川 映像で記録されているはずですよ。個人的に定点観測しておられる方も何人もいらっしゃるようです。それは資料として貴重なものですよ。

長尾 ぜひアーカイブしておいてください。国立国会図書館はいろんな資料をアーカイブすることになっていまして、展示会の図録やパンフレットなどもその対象です。展示会などは日本の各地でいろいろなものが行われていて、集めるのが大変ですが。あらゆる資料を集めて、100年200年、もっともっと長い間残していかなければいけません。古いもので奈良時代のものからありますが、和紙に墨で書いたものがいちばんもちますね。いまコンピュータでいろいろやっていますが、千年先はどうなるかわからないですよ（笑）。先生のような彫刻は千年もつんじゃないですか。

澄川 わかりませんね（笑）。美術館に入れていただいて、保存してもらえれば。コレクターに行くとその先どうなるかわかりませんからね。図書館と同じで、公立の美術館の収

蔵品としていただければだいじょうぶだと思います。そのために美術館には収蔵庫があるんですよ。いまは印刷技術が優れてますから、劣化する前に色などの現状を紙に写し取っています。木の場合は、色が変わっても上手に保存すれば木じたいはもちますが。木は生きてまして、導管という血管みたいなものがずーっと通って呼吸してますから、密封しちゃだめなんですよ。木造建築で残っているのは、法隆寺とか外にさらしてあるものですね。

長尾 正倉院なんかもそうですね。

澄川 そうなんです。きちんと保存するのは結構たいへんです。美術館だと、保存修復の専門家が必ず一人は必要なんです。いま財政が厳しいから、日本の美術館にはほとんどいないですね。外国の美術館にはほとんどそういう専門家がいますし、藝大にも保存修復の科がありますが。

長尾 この図書館にも保存担当の課がありまして、和書や洋書に分かれて約10名の専門家がいます。本は利用すると傷みますから、修復の必要なものがものすごくたくさん来るんですよ。

澄川 患者を抱えてるようなものですね。

長尾 傷まないための工夫を考えたり、修復について、公共図書館などの職員向けに研修もしています。

澄川 保存が課題であるところは、図書館も美術館も同じですね。

いま日本には、自治体の美術館が各地にあり、ほかに私立の美術館にも相当な収蔵品がありますが、国立の美術館は5館しかないんです。少ないですよ。フランスなんかものすごくたくさんありますね。

長尾 フランスの文化政策はうらやましいで

すね。

澄川 それでいて、農業国なんですよ。世界から尊敬されて。

長尾 彼らの文化力によって、フランスの収支はプラスになっていますね。日本の美術品にも世界に発信すべきものがたくさんあるし、東洋、日本の良さがだんだん世界に理解されるようになってきたところですから、このチャンスに文化政策をうまくやって日本の特質をアピールしたらいいと思いますね。

澄川 スカイツリーのある押上は、江戸時代に葛飾北斎がいたところなんですよ。浮世絵は大人気だから、国が北斎美術館をつくればと言ったんですが。墨田区でつくるそうです。

長尾 私どもの図書館にも江戸時代の黄表紙

とか気楽に読めるようなものもたくさんあるんです。ああいうものを集めてうまく解説をつけて展示したら面白いと思うんですが。

澄川 面白いですね。図書館にはぜひ、歴史を刻んでいていただきたい。

長尾 地道にね。それに、いいものを持っていることをわかってもらうよう解説していく努力をしなければならないですね。先生とお話していると、日本のこれからは希望がわいてきました。

澄川 お互いに希望をもてるようにしましょう。新しい年にはいろいろ少しずつ変わってしょうから、卯年だし、ぴょんと跳ねて(笑)。

長尾 スカイツリーで上向きになってがんばらないと(笑)。きょうはありがとうございました。

対談を終えて

澄川先生とは国立大学法人化の困難な時代に、共に学長として苦勞した中で、先生のお考え、おっしゃることはきっと新年にふさわしい未来に対する希望が湧き上がってくるものと思ってお願いしましたが、まさにそのような対談になったと思います。人に最も力を与えるものは人間的な深い感動であり、これは芸術によって最も良く表現され人に伝えられます。

先生の彫刻は清らかさ、すがすがしさ、そして温かみを感じさせながら、そこに凜とした気品がただよっており、見る人を引き込みます。先生の作られる物はこのように日本人のもつ優れた特質が自ずと表現されたものと

なっています。先生との対談もそのような内容のものとなりました。日本人の特質をよく見ること、歴史、伝統、その具体化である文化財などを観察することによって、これからやるべきことが自ずと明らかになり、自信がついてくるのであって、他からの借り物的思考ではだめだということです。岩国の錦帯橋や法隆寺の五重塔をよく眺め、よく調べることによって多くのものを得たというお話は大変教訓的です。先生のこのような経験が今話題になっているスカイツリーに具体化され、伝統と最先端技術の融合した作品として結実しているというのはまことに見事なことと感じました。(長尾)

(この対談は2010年11月15日に国立国会図書館東京本館で行われました。)

言葉のエッセイ

第1回 表記と発音

英語を習うときにスペリングを覚えるのに苦労された方は多いことだろう。英語以外の言語を学習された方ならおわかりのとおり、ほかの言語では、比較的綴り字と発音は、一致するものである。いいかえれば、英語ほど綴り字から読みがわからない言語はないということである。例えばwomenであるが、これを「ウイメン」と読めというのは、かなり無茶な話である。ちなみに、これを素直に「ウォーメン」と読めば、中国語の「私たち」になる。

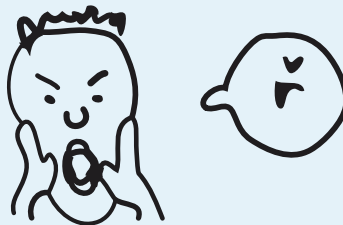
中国語のピンインは、比較的ローマ字読みに近い表記になっているが、中には妙なものがある。例えば、「qu」と書いて「チュー」と読ませる。あるいは、「xi」と書いて「シー」と読ませる。以前、アメリカ人の男性が、ピンインの表記に違和感を覚えると述べているのを耳にしたことがあるが、さっきのwomenを考えると、人のことをいえたものではない。要は、こう表記したらこう読めという規則を決めれば、それに従えばよいのである。最近あまり見かけなくなってきたが、訓令式のローマ字で「シ」は「si」であり、英語に慣れた私たちにとっては、「スイ」と思わず読んでしまいそうになる。しかし、ポーランド語では、「si」は、「シ」と読む規則になっており、「スイ」は「sy」と表記することになっている。また、「rz」は、どんなに奇妙に思えても、「ジュ」（日本語の「ジュ」とは異なるが、ほかにカタカナでは表記しようがない）と読まなければならない。二度目になるが、そう決めればそう読めばいいというだけの話である。

ところで、日本語の仮名はどうかというと、

これはまた必ずしも表記と発音が一対一に対応しているわけではない。すぐに思いつく例外は、「は」や「へ」を「ワ」や「エ」と読ませる規則であるが、ほかにも無意識に読み分けているケースがある。例えば、「ん」は、「本」というときは発音記号では「n」であるが、「頑張る」というときは「m」で発音している。さらに、「音楽」というときは、「ŋ」と発音している。また、「原稿」をきちんと「ゲンコウ」と発音している人はまれで、たいてい「ゲンコー」と発音している。これも規則といえば規則で、お行の後の「う」は、伸ばす音に変えて発音するという決まりがあるということである。

先ほど、ポーランド語の「rz」は日本語では表記できない音と述べたが、この音は、比較的ほかの言語にもある音である。例えば、ロシア語の「ж」、中国語の「zh」がこの音に近い。たいていの言語は、一つや二つ発音の難しい子音を持っている。例えば、イタリア語では「gli」、スペイン語では「ll」、ハンガリー語では「gy」や「ty」である。チェコ語の「ř」に至っては、どうやって発音しているのか不明で、両の頬を押さえて巻き舌の「r」を発音すればこの音が出るという説もある。また、グルジア語のように「ɟ」「ɢ」「ʁ」「ʕ」「ʁ」「ʕ」といった難読の子音を多数擁する言語もある。なお、グルジア語は、いろいろな意味で変わった言語であるが、表記と読みは非常に規則的で、おおよそ文字の表記どおり読めばよいという、表記規則上は優等生の言語である。

（ゴガク・マニアシュヴィリ）



ホームページとすごす日々

年中無休、毎日24時間働き続け、1日に平均1万人以上と相対する働き者。国立国会図書館に関する情報を記憶し、多様なサービスを案内するコンシェルジュ——そんな彼が、私が日ごろお世話している国立国会図書館ホームページ君です。

多くの人々の目を意識して、言葉づかひや見栄えには気を遣います。彼の目標が「いつでも、

どこでも、だれでも」気軽に会いに来てもらうことだから、お世話する私も手を抜けません。

最近彼が特に気にしているのは、「だれでも」の部分。アクセシビリティという考え方を大事にして、どんな人にもきちんと情報を伝えることを目指そうとしています。たとえば、視力の弱い方が文字を拡大できるようにしたり、音声読み上げソフトで内容をきちんと理解できるようにしたり。見た目には表れない「ソース」という内面を磨く、地道な努力です。今までの癖が抜けなくて、ぶっきらぼうなところもあるけれど、これからだんだん優しくなっていくはず。英語で話せる内容も少しずつ増えているし、実はポルトガル語も少しだけ話せる*ので、外国の方にもどんどん会いたいそうです。



そんな彼も、今年の6月で15歳。思春期まった中のお年ごろになって、イメチェンを考えているみたい。あんまり過激な見た目は困るけど、内面の成長に合わせて変わってもいいのかも。中国語・朝鮮語にも興味がある様子で、来年までには日常会話くらいはできるようにと張り切っていますが、はてさて。

この年末年始も休まなかった彼に会いたくなったら、<http://www.ndl.go.jp/>を訪ねてみてください。今後の成長を、皆さんも見守ってくださいね。

(電子情報企画室 茹で蛙)

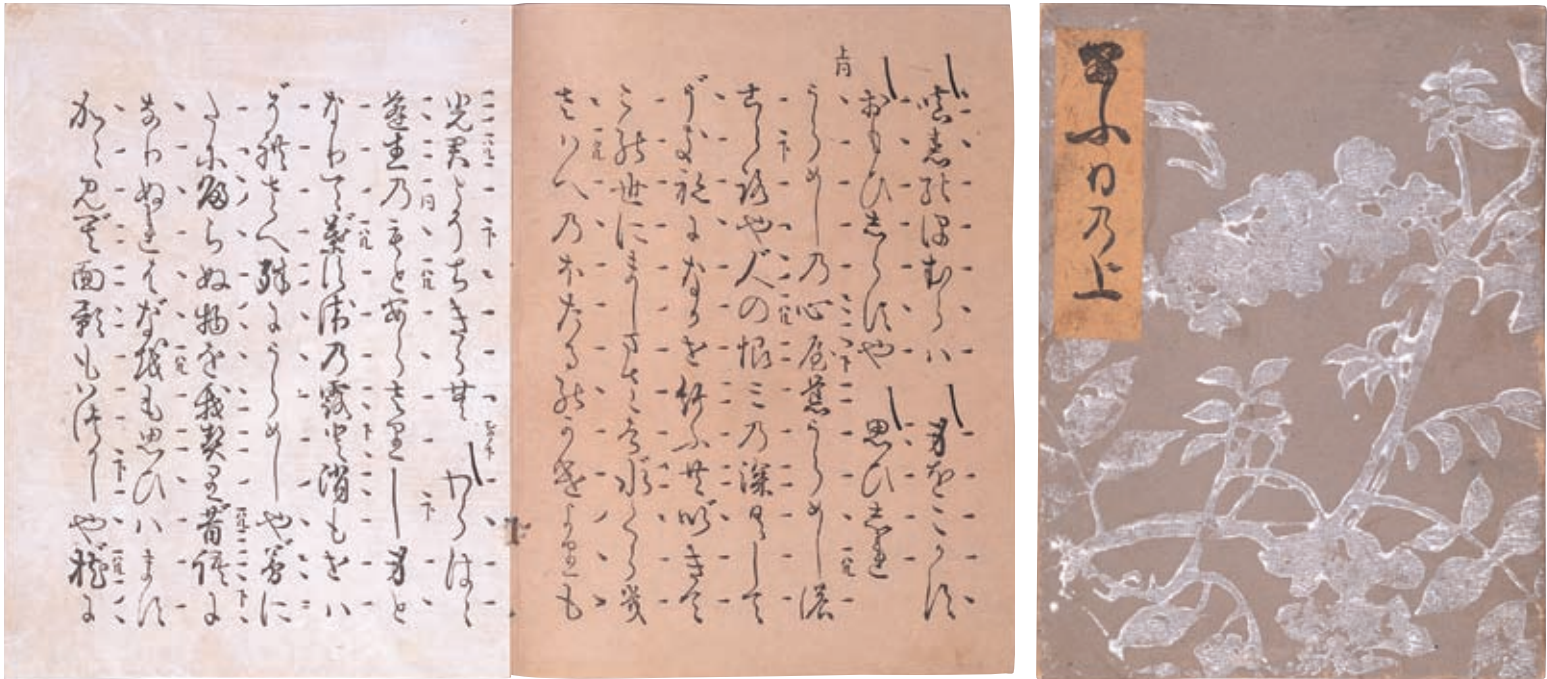
*電子展示会「ブラジル移民の100年」ポルトガル語版
<http://www.ndl.go.jp/brasil/pt/>

古典籍の世界へ

間島 由美子

月 さきやうの
月 中ねとの
月 右高代まの
月 ひことの
月 ふせん
長え ながのやとの
月 大二との
月 のとの
月 たー雨の
月 ちか乃との
月 ちえとの
月 ひうの
月 さらまとの
月 けらもてけの
月 出羽の
月 うのとの





観世流謡曲嵯峨本『謡本』101冊のうち「あふひの上」。世界で最も美しい書物のひとつといわれる。
 <請求記号 WA7-256 >

1 文化遺産としての古典籍

ここで「古典籍」とは、江戸時代以前の書物や古文書を総称しています。古典籍は「写本」と「刊本」とに分けられます。「写本」は筆で書かれたものを指し、どのような人、どのような時代に書かれたかが重要です。その中で「自筆本」と「古写本」が重視されます。「自筆本」とはその分野の大家が残した筆跡で、資料的価値に加え書いた人物の魅力がさらに価値を増す資料です。「古写本」とは室町時代以前に書かれたものを指し、学術的に貴重な資料となっているものです。わが国には長い文化の伝統があり先人は書物を尊んできまし

たので、何百年も前の古写本が多く残されています。あまり知られていないようですが、古写本の豊富なことにおいて日本は他に並ぶ国がないといわれています。誇らしいことではないでしょうか。

『日本書紀』『万葉集』『源氏物語』『伊勢物語』などの代表的な古典は、成立してからずっと筆で書き写されて伝わってきました。その結果、今日、700年も800年も前の古写本がいろいろあり、国宝や重要文化財にもなっています。これらの古典は、17世紀初頭、江戸初期に初めて印刷刊行されました。時代は「写本」から「刊本」に移っていきます。当時の「刊本」は木製の活字で生まれ



天文2 (1533) 年跋刊『論語』。卷末に清原宣賢^{のぶかた} (1475-1550) の書き入れがある (写真左)。<請求記号 WA6-90>

て摺られました。これを明治以降の西洋式の活字印刷と区別して「古活字版」と呼んでいます。写本は一部作るだけでも大変ですが、印刷物は一度に何部も出来上がりますので、同時に多くの人々が同じ本を読めるようになりました。古典の歌や物語の文章などはこの頃にほぼ定着してきます。古活字版は文化史上非常に重要な書物群となっています。けれども古活字版の時代はわずか約50年間で終焉しました。その原因の一つは、活字を組むため増刷に時間がかかり、読者層の増大に追いつかなかつたからといわれています。

以後、江戸時代のおよそ200年間は、一枚の板

すなわち「版木」に文字や絵を彫るという方法で、文学、芸術、歴史、医学、科学など様々な分野の書物がおびただしく刊行されました。やがて18世紀になり、熟練した彫り師や摺り師の高度な技に、美しい四季をもつこの国独特の繊細で洗練された美意識が加わり、華麗で精緻な多色摺りの印刷物が生まれました。錦のように彩り鮮やかな「錦絵」や、葛飾北斎や喜多川歌麿などの優美で魅惑的な絵入りの「絵本」です。絵や文字、装訂などに意匠を凝らしたこの種の絵本は、わが国印刷文化史上の精華といえるものですが、“ehon”と称されて、国内ばかりでなく外国からも注目され、



慶長13（1608）年刊古活字版『伊勢物語』。挿絵入りで刊行された最初の文学書。〈請求記号 WA7-238〉

高い評価を得ている芸術品となっています。

古写本から絵本に至るまで、千年余の文化の証しである日本の古典籍は、世界的に貴重な文化遺産です。

2 伝えられた古典籍

紙資料は手に触れると確かなものですが、^{まも}護らなければ消滅していきます。何百年もの間、古典籍は読まれ、愛され、保護されて、戦乱、火災、天災を潜り抜けて今日に届けられました。

古典籍は時代とともに人々の手から手へと渡されてきた資料ですので、多くのゆかりの場所で所

蔵されています。例えば、江戸幕府の蔵書は国立公文書館内閣文庫、宮中の図書は宮内庁書陵部にあります。撰関家筆頭近衛家の資料は陽明文庫に、冷泉家でも長い伝統のある資料を守ってきました。大名の愛蔵書の多くは県立図書館や大学図書館などで保管されています。家康から譲られた尾張徳川家の蔵書は、名古屋市蓬左文庫が引き継いでいます。寺院や神社でも古い資料を所蔵しています。一方、東洋文庫、大東急記念文庫、天理大学図書館などでは、善本・稀本と呼ばれる古典籍を重点的に収集し、研究に供しています。また、明治から戦後にかけて外国に渡った資料は、大英



寛永頃(1624~1643)刊「御馬印」6巻6軸。家康はじめ総計170人の武将の馬印が並ぶ。わが国多色摺り印刷の源流として注目される。

図書館 (British Library) やニューヨーク公共図書館 (New York Public Library) など、欧米の図書館や博物館の書庫を安住の地としています。このように、日本の古典籍は様々な場所で大切に保存されています。

3 国立国会図書館の古典籍

古典籍は過去から託された資料ですから、納本制度で収集される現代の出版物のように流通しているわけではありません。国立国会図書館の古典籍は、すべて資料収集方針のもとに、寄贈や購入により収集されたものです。

スタートは、明治初期に架蔵された旧藩校所蔵本4万3,630冊でした。これは全藩校蔵書のわずか5%程度ということです。その後、次のようなコレクションが帝国図書館の時代に収蔵されました。

- 江戸幕府の記録類——通称「旧幕引継書」
- 宗家文書——対馬藩宗家伝来の朝鮮貿易関係文書
- 明治時代の国学者榊原芳野 (1832-1881) 旧蔵書
- 大惣本——滝沢馬琴が訪れ、坪内逍遙が通った名古屋長島町の貸本屋大野屋惣八旧蔵の黄表紙類
- 円光寺本——足利学校庠主 (校長) 禅僧閑室元信 (1548-1612) 旧蔵の仏書・漢籍・朝鮮本類
- 美術史家今泉雄作 (1850-1931) 旧蔵の茶道関係書
- 冨山文庫——幕末明治の国学者根岸武香 (1839-1902) 旧蔵の古文書・地誌・双六類
- 『日本博物学年表』の著者白井光太郎 (1863-1932) 旧蔵の本草学関係書
- 京都帝国大学総長・宇宙物理学者新城新蔵 (1873-1938) 旧蔵の暦学・天文学関係書



朱、白、水色の部分は印刷の可能性が高い。金は手で施してある。〈請求記号 WA8-7〉

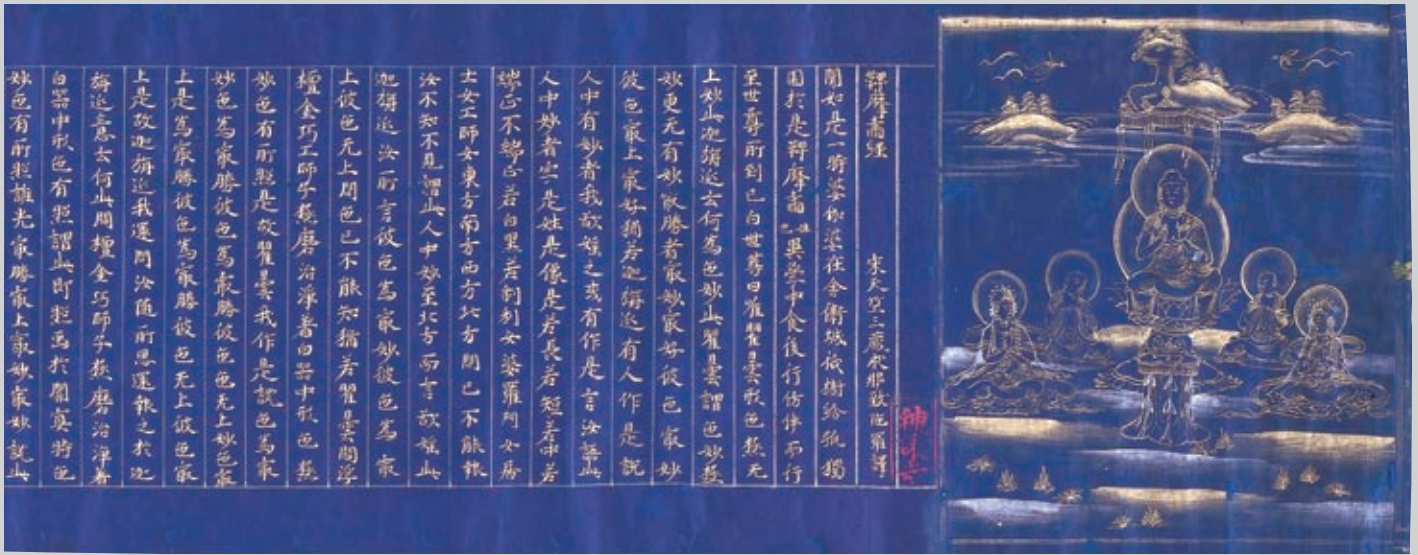
○わが国最初の理学博士伊藤圭介（1803-1901）
旧蔵の本草学関係書

戦後国立国会図書館となってからは、皮膚科
医土肥慶蔵（1866-1931）旧蔵の日本人漢詩文集、
国語学者亀田次郎（1876-1944）旧蔵本などが購
入されました。

近年は、天文版『論語』（16ページ写真）、後陽
成天皇が命じて刊行させた勅版『日本書紀』〈請
求記号 WA7-251〉、観世流謡曲嵯峨本『謡本』（15
ページ写真）、古活字版『伊勢物語』（17ページ写真）、
錦絵の源流とされる色刷り資料『御馬印』6巻揃
い（上写真）、古活字版『寛永行幸記』の絵巻（14
ページ写真）など、出版文化史あるいは書誌学にお
いて重要な資料が収集されています。

4 電子図書館で読む古典籍

年月を経た古典籍の大部分は非常に傷み褪色し
ていますので、図書館では紫外線を防ぎ、書庫の
温度や湿度を一定にして保存しています。利用す
るときには壊れないよう細心の心配りが必要で
す。図書館資料の「保存と利用」の両立は長年の
夢でしたが、いまや現実となりました。国立国会
図書館は古典籍を国の文化遺産と位置づけて、意
欲的にデジタル化しています。前述のような貴重
な書物の多くが、国立国会図書館のホームペー
ジから閲覧することができます。展覧会で垣間見た
古い本や美しい本を、自宅に居ながら読み楽しむ
ことができます。「電子図書館」の椅子に座って
みませんか。その蔵書を少しご紹介します。



1



2

1 神護寺經『鞞摩肅經』

紅葉で有名な京都高雄の神護寺に伝来した經典です。「神護寺」の朱印が見えます。文治元(1185)年、平家一門が壇ノ浦で滅びた年、後白河法皇(1127-1192)が寄進したものです。見返しの絵は釈迦說法図、鳥の形の山は「靈鷲山」です。經名の「鞞摩肅」は、釈尊の前で説法を聞く弟子の名前から題されています。紺色の料紙は瑠璃色に輝く仏の国土、金泥の文字は仏の姿の象徴で、書写者は一字ごとに礼拝しつつ書いたといいます。仏教も漢字も外来のものですが、柔らかで清らかな筆の跡はわが国オリジナルの美です。表紙も軸も贅沢に作られている紺紙金字一切經の一卷です。800年を経て金銀のきらめきは消えてしまいましたが、優雅な卷子本の姿に、遠い時代の人々の憧れの世界へ思いをはせることができます。

わが国の「古写本」の中で最も多く残るものは仏教の典籍です。国立国会図書館には奈良時代以来の数々の貴重な經典が図書館資料として所蔵されています。

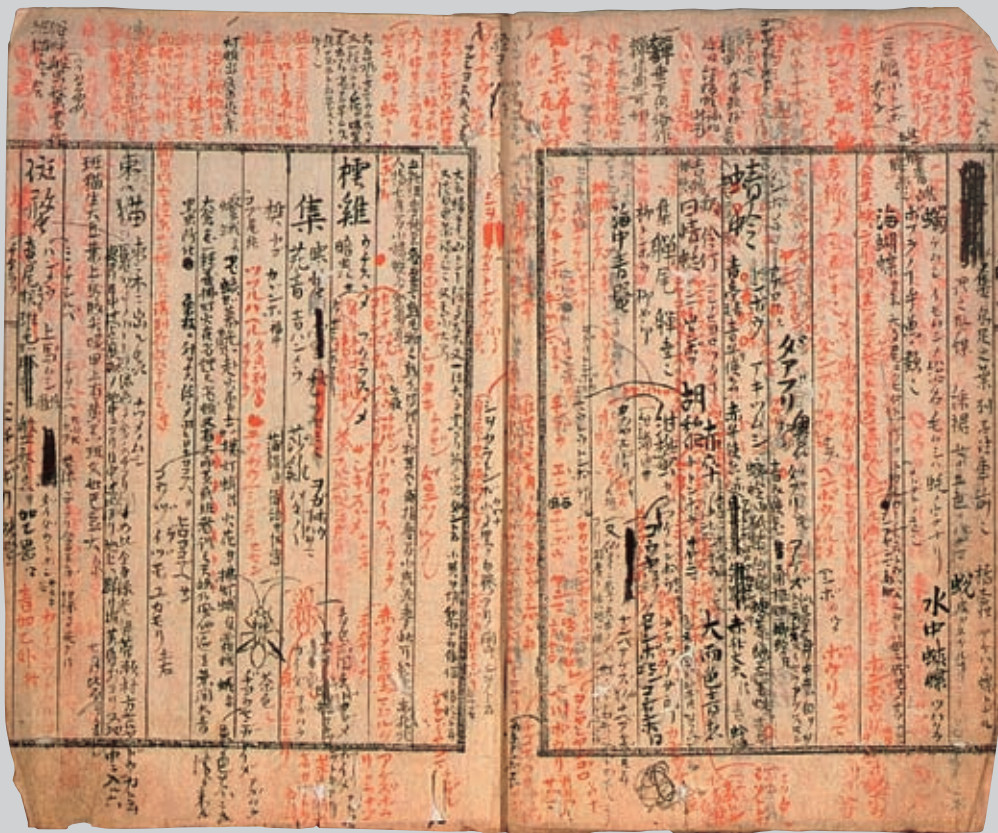
→貴重書画像データベース
デジタル貴重書展 <請求記号 WA231>

2 絵巻『義経奥州下り』

室町時代後期頃に作られた絵巻物の一部です。実際の大きさは料紙の高さ約30cm、全長約9mあります。

源義経が平家を破った後、兄頼朝に追われ奥州の藤原秀衡のもとに逃れていく物語を記したものです。先に絵の部分が描かれ、その後で文字が書かれました。場面は、あねはの松を過ぎて山中で北の方が出産したところです(写真右)。小さくて赤ちゃんはよく見えませんが、弁慶が幼子を膝に抱き「なんし(男子)は七さいまでおあやかりとうけ給候。…御くわほう(果報)の御あやかりは、はくぶ(伯父)よりとも(頼朝)に御あやかり御申候へ。ゆみ(弓)はためとも(為朝)の御ゆんせい(弓勢)、御いのちのなかき事は、みうらの太すけ(三浦大介)が、ひやく六になり候に御あやかり給へ…」と、幸多く命長くと、願い語りかけています。

→貴重書画像データベース
開館60周年記念貴重書展
<請求記号 WA31-18>



3

3 小野蘭山自筆ノート『本草綱目草稿』

江戸時代屈指の本草学者小野蘭山（1729-1810）が、数十年にわたり使用した自筆の講義ノートです。蘭山は25歳で京に私塾を開き、71歳のときに幕府に招かれ江戸に出、82歳で没する前日まで医学館で講義を続けたといわれます。その名を慕い参集した門弟一千人ということです。講義の中心は中国の李時珍の『本草綱目』全52巻。この本に書かれた漢名の動植物に一致する日本の動植物、わが国で薬となる動植物、鉱物を、生涯をかけて実地探索、研究し、講述しました。成果は後に「日本の博物誌」といわれる大著『本草綱目啓蒙』¹として刊行されました。

ノートは細かな文字で隙間なく紙の裏にも書かれています。電子図書館では、このような資料を拡大して閲覧できることが長所です。

綴じられた紙の間からは若い弟子に宛てた手紙の下書きも出てきました²。そこには深い学識を示す貴重な言葉の数々が残されていました。蘭山が触れた原紙は、いまにも壊れそうに薄くなっています。写真は「蜻蛉」の部分です。

→描かれた動物・植物 <請求記号 WB9-10>



4

4 谷文晁筆『蘭山翁画像』

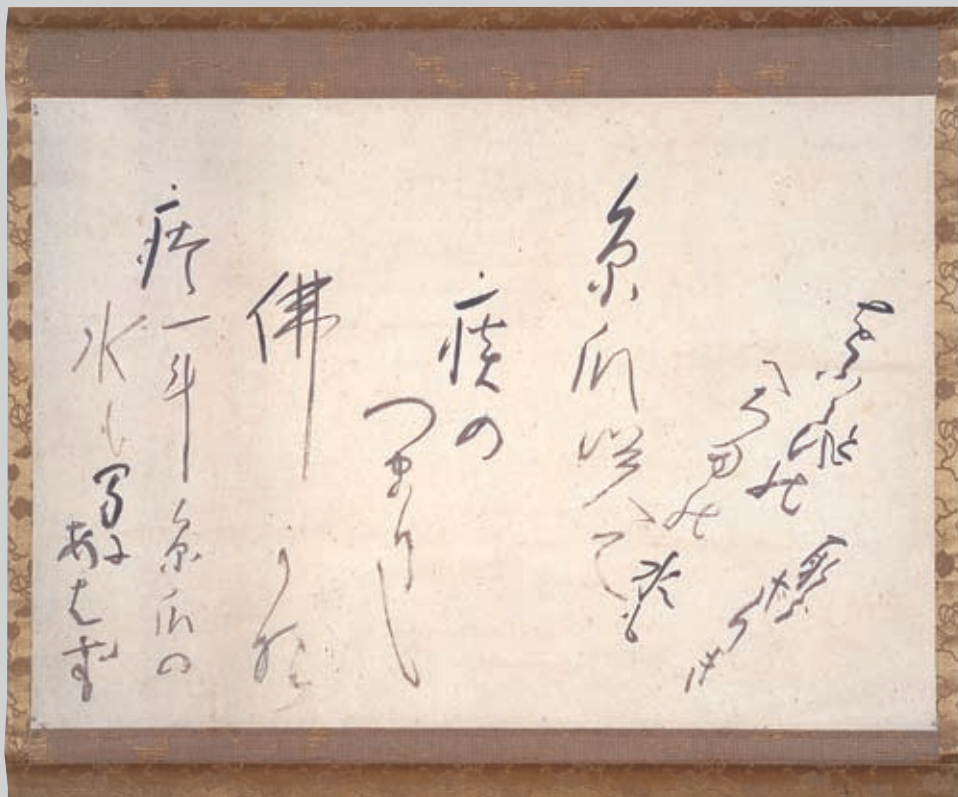
この一幅は、天保5（1834）年の小野邸火災の際に、多数の書物が焼失するなか奇跡的に助け出されたそうです。平成13年に御子孫の小野強氏から国立国会図書館に寄贈されました。文化6（1809）年に谷文晁（1763-1840）が描いた81歳の小野蘭山です。肖像上部の賛は蘭山の自筆です。江戸南画の大成者文晁も蘭山を敬愛する弟子の一人でした。肖像の右下に小さく「門人谷文晁沐手敬繪」と落款があります。拡大してご覧ください。知性と気品あふれる老学者の姿が生き生きと画面に顯れます。47歳、壮年の文晁の筆力が写し出した蘭山の表情や指先は、いまにも動きそうです。写真を超えた肖像画を堪能することができます。

→貴重書画像データベース

<請求記号 WA21-29>

¹ 電子展示会「描かれた動物・植物」の「第1章 II 自然へのあつまなざし—18世紀」で閲覧できる。

² 磯野直秀、間島由美子「小野蘭山寛政七年書簡下書」『参考書誌研究』（国立国会図書館）（63）2005.10 pp.1-10 <http://rnavi.ndl.go.jp/bibliography/tmp/63-02.pdf>



5

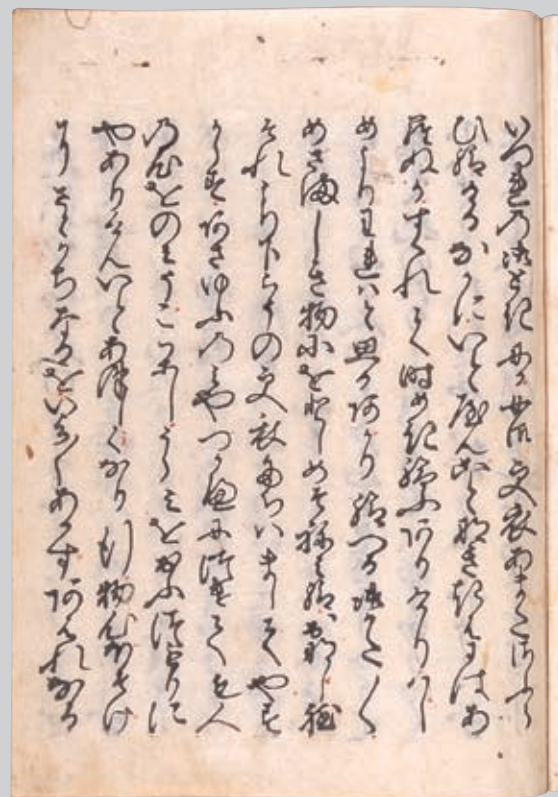
5 正岡子規自筆『絶筆三句』

正岡子規（1867-1902）は明治35（1902）年9月19日、36歳で亡くなりました。青々と繁る庭先の糸瓜棚を明るい月が照らしていたそうです。逝去の12時間前に、子規が仰臥のまましたためた書です。

最初に大きく「糸瓜咲て/痰のつまりし/佛かな」と第一句、次いで左に「痰一斗糸瓜の/水も間に/あはず」と二句め、さらに右に最後の句を「を登ひの」と書きはじめ、横に「と」と書き加えて「を登とひの/へちまの水も/取らざりき」と記して、筆を離れたということです。写生の句の到達点でした。

明治の資料は古典籍とはいませんが、古典の香りを放つので、筆の跡を鑑賞していただきたくご紹介しました。正岡子規の自筆はほかに『草花帖』〈請求記号 WB38-1〉、『菓物帖』〈請求記号 WB38-2〉などがご覧になれます。

→貴重書画像データベース
 <請求記号 WB41-61>



6

6 古活字版『源氏物語』

漆黒の墨色で見事な連綿体ですので、一見すると筆書きに見えますが、写本ではありません。古活字版『源氏物語』「桐つぼ」の冒頭部分です。刊行されたのは慶長頃（1596～1615）で、それまで写本で伝わった『源氏物語』がはじめて印刷に付された、貴重な印刷物です。

「いつれ」「の」「御」「とき」「にか」というように活字が彫られ、それらを組み合わせて1葉(丁)（2ページ）が印刷されます。54帖の『源氏物語』を全巻筆写するには何か月もかかりますので、同じ活字を繰り返し用いることで容易に何部も刷り上げることのできる印刷技術の出現は、わが国の書物の歴史の上で画期的なことでした。長い間、限られた人々だけに読まれていたこの物語が、多くの読者に開放されていくことになりました。なお、最後の宇治十帖のあたりは活字が何度も使用されたため細く痩せ、印刷のにじみや擦れが目立ちます。古活字版の印刷物としての表情ですので比較してみてください。

→貴重書画像データベース
 <請求記号 WA7-263>



7

7 江戸版『好色一代男』

井原西鶴(1642-1693)の『好色一代男』です。「浮世草子」とよばれ、遊廓を舞台に当時の人情や風俗が書かれています。版本には大坂版(上方版)と江戸版の2種類があり、どちらも「貴重書画像データベース」でご覧になれます。大坂版は目にする機会が多いので、ここでは貞享元(1684)年に刊行された稀少な江戸版をご紹介します。

大坂版が刊行されるや1年後には江戸版が出ています。大坂版も江戸版も版が磨滅するまで何度も刷られ、ベストセラーでした。大坂版では漢字とひらがなが混じっていますが、江戸版ではひら

がなばかりが使われ、誤字脱字もあります。大坂版の挿絵は西鶴自身ともいわれ丁寧に描かれていますが、菱河師宣と刊記にある江戸版の挿絵は、かなり簡単な絵になっています。このようなことから江戸版が急いで制作された様子が推測されます。時代の息吹も一緒に伝わってくる刊本です。

主人公の54年間の恋の遍歴は『源氏物語』に倣っています。8歳の世之介が手にしているのは、手習いの師匠に代筆してもらった恋文です。

→貴重書画像データベース

<請求記号 WA9-10>



貴重書画像データベース

国立国会図書館の所蔵する貴重書等から特色ある資料をカラー画像で閲覧できるデータベースです(一部解題、翻刻あり)。平成22年12月現在約957タイトル(約5万1千コマ)を収録しています。

平成23年4月からは、新しく公開するデジタルアーカイブシステムに統合する予定です。

<http://rarebook.ndl.go.jp/>



8

8 喜多川歌麿画『^{むしえらみ}画本虫撰』

2006年秋、マンハッタンの中心に位置するニューヨーク公共図書館で“Ehon: the Artist and the Book in Japan”と題する日本の挿絵入り本の展覧会が開催されました。担当者のロジャー・キーズ氏は「“ehon”は世界の中で最も美しい芸術のひとつである。しかし、作品が稀少であるため、今日西洋ではもちろん、日本国内でもほとんど知られていない。“ehon”は、華麗で洗練された官能的な美、独創性、深い知性、遊びの精神、軽やかな感触など、すばらしい多様性を持っている…」³と解説しています。

ここでいう“ehon”とは、子ども向けのものではなく、文章、文字、印刷、料紙、装訂などすべてに贅を尽くして作られた、江戸時代の大人のための「絵本」を指します。その頂点に君臨する狂歌絵本のひとつがこちらです。天明8(1788)年、遊廓のガイドブック『吉原細見』の刊行で富をなした蔦屋重三郎(1750-1797)の財力と、喜多川歌麿(1753頃-1806)の才能とが出会い、生まれました。

純白の2匹の蝶とダークグレーのトンボが、揺

れるポピーと戯れています。狂歌が2首。「夢の間は 蝶とも化して吸てみむ 恋しき人の花のくちびる」「人ごころ あきつむしともならばなれはなちはやらじ とりもちの竿」。

→貴重書画像データベース
 <請求記号 WA32-8>

間島由美子氏 プロフィール

中京大学文学部客員教授。元国立国会図書館職員。「寛永行幸記」絵巻をはじめとする書誌学的研究と国立国会図書館における古典籍の収集・整理・調査活動の功績により、第29回上野五月日本文化研究奨励賞受賞。



9

9 大判錦絵『歌舞伎十八番之内勸進帳』

明治23(1890)年5月に新富座で上演された「勸進帳」の錦絵三枚つきです。絵師は最後の浮世絵師といわれた豊原国周(1835-1900)。

能舞台を模した老松と若竹を背景に、中央で白紙の巻物をひろげてにらむ山伏姿は、九世市川団十郎です。対峙する富樫(初世市川左団次)は、千鳥模様の大紋のいでたちで太刀の柄に手をかけています。脇には、笹竜胆の袴を着けて強力姿の義経(五世尾上菊五郎)が構えています。安宅の関の緊迫した場面ですが、華やかな舞台の雰囲気が画面に広がっています。

国立国会図書館が所蔵する錦絵約1万枚は、歌舞伎をはじめ幕末・明治の風俗や世相を知ることのできる貴重な資料群です。ほとんどが電子図書館で閲覧できます。

→貴重書画像データベース
 <請求記号 寄別8-5-2-2>

(ましま ゆみこ)

電子展示会



総合テーマ「日本の記憶」のもとに国立国会図書館の様々な資料をテーマごとに選び、わかりやすい解説を付して紹介する、ホームページ上の展示会です。貴重書を紹介する「デジタル貴重書展」「開館60周年記念貴重書展」(写真)、江戸時代の博物誌を紹介する「描かれた動物・植物」など、平成22年12月現在、17種類の展示会があります。

国立国会図書館ホームページ
 (<http://www.ndl.go.jp/>) > 電子展示会

3 Ehon : the artist and the book in Japan. / Roger S. Keyes. New York Public Library, c2006. <請求記号 YZ-B1113>

本屋に ない本

国立国会図書館は、法律によって定められた納本制度により、日本国内の出版物を広く収集しています。このコーナーでは、主として取次店を通さない国内出版物を取り上げて、ご紹介します。

映像アーカイブのノート

映像メディア創造機構刊
〒231-0005 横浜市中区本町4-44
2009.3 159頁 26cm <請求記号 UL311-J3>

ここ数年で「アーカイブ」という言葉はずいぶん浸透したように思う。例えば、インターネットで「過去記事のアーカイブ」といった表記がなされるようになり、仮面ライダーのオープニングの歌詞にも登場した。広辞苑の第5版（1999年）には「アーカイブ」の項目はなかったが、第6版（2008年）には収録されている。国立国会図書館でもデジタルアーカイブポータルが2007年から始まった。

このアーカイブという語は、「古い」というギリシャ語に由来し、アルケオロジーと語源を一にするらしい。説明不要かもしれないが、過去の記録を保存するという意味である。記録というと公文書といった文書のみが対象のように考えられがちだが、映像も記録の一種である。それゆえ、「映像アーカイブ」も存在するのである。

本書は、2007年7月に映像のアーカイブをテーマにして開かれた東京藝術大学でのセミナーと、2008年11月に世界各国のおもな映像アーカイブから実務者が集まった東京国立近代美術館フィルムセンターでの国際シンポジウムの発表をまとめたものである。

冒頭の「アーカイブって何？」というページで基本的なキーワードを挙げているため、初心者にもどこがポイントなのかわかるようになっている。掲載されている資料はすべて日本語と英語が併記されており、それぞれの表現を確認できる。また、後半では各国の映像アーカイブの現状が述べられてお

り、国ごとの状況を比較できるようになっている。

映像と印刷物の保存には、共通する課題が多い。映像の媒体にはナイトレートフィルムという発火性の高いものがあり、そのための

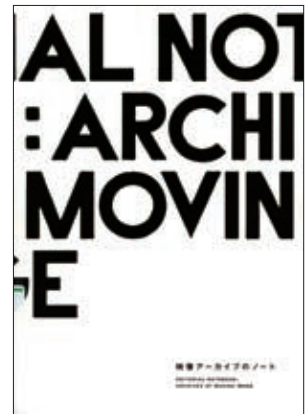
特別の対応が必要であるなど、個別に見れば異なるところもあるが、いかに現物を保存していくか、またはデジタル化していくかという点が問題になっていること、ボーンデジタル（最初からデジタルで作成された作品）の作品が増加していること、著作権者不明の「孤児」作品への対応が課題となっていること等は同じである。

近年、美術館・博物館、文書館、図書館の連携が話題となっている。これらの機関が所蔵資料を大きく「文化資源」ととらえ、デジタル化、データベースの構築など共通の課題に取り組もうとするものである。情報技術の進展により、文化資源の継承とその活用は新たな局面を迎えている。

最後に、本書で特徴的なところは、そのデザインであろう。ページによって紙の素材を変え、同じプレゼンテーションの中でも文字の段組み、色やフォントに変化をつけることで、緩急を持たせるといった工夫がされている。ただ、そのために読みづらいのがやや難点ではある。

初心者から研究者までを対象とした内容なので、映像の保存に興味がある方は一読をお勧めしたい。

(総務部人事課 ^{まつなが}松永 しのぶ)



中国国家図書館との 第29回業務交流

平成22年11月23日～30日、中国国家図書館(北京)において「国立図書館の立法・政策決定サービス」をテーマとして標記の業務交流が行われた。山口広文調査及び立法考査局専門調査員・国土交通調査室主任はじめ5名からなる代表団が参加した。

国会サービスまたは立法・政策決定にかかわるサービスの制度、組織、運営および電子情報サービスについて、双方から詳細な報告が行われ、活発な質疑応答と意見交換が行われた。

平成22年度 国立国会図書館長と 行政・司法各部門 支部図書館長との懇談会



平成22年12月7日、東京本館において標記の懇談会を実施した。これは、支部図書館間の連携協力について懇談し支部図書館の充実強化に資するため、支部図書館長等を招いて毎年行っているものである。

国立国会図書館(中央館)から、武藤寿行総務部副部長が、電子図書館事業の進捗と課題について報告した。

支部図書館からは、葛見雅之支部財務省図書館長が、同図書館の沿革、概要および業務・サービス改善への取組みについて報告した。

また、マイケル・ハフ氏(米国大使館情報資料担当官)が、米国国務省に属し、世界各国の米国大使館・領事館に設置されているレファレンス資料室(Information Resource Center : IRC)について、在日米国大使館におけるIRCのサービスを中心に特別講演を行った。

その後、米国国務省等連邦政府の図書館、人材育成等について、長尾真館長と支部図書館長等との間で懇談が行われた。

平成22年度 国立国会図書館長と 大学図書館長との懇談会

平成22年11月11日、東京本館において標記の懇談会を実施した。これは、国立国会図書館が、国公立大学図書館協力委員会委員館の図書館長および関係機関の代表者を招いて毎年行っているものである。

国立国会図書館から、懇談会の下部組織である「国立国会図書館と大学図書館との連絡会」の活動概要を報告した。連絡会の「学位論文電子化の諸問題に関するワーキング・グループ」は、学位論文の電子化について許諾手続きの共通化に向けた検討を進め、平成22年6月に合意に達している。

また、大学図書館からは、田村俊作氏(国公立大学図書館協力委員会委員長、

慶應義塾大学メディアセンター長)が、外国電子ジャーナルの価格高騰への対応と慶應義塾大学の「電子学術書プロジェクト」について報告を行った。

その後、国立国会図書館におけるデジタル化資料の館外提供の見直し、大学における資料の保存と廃棄等について質疑応答、意見交換が行われた。

平成22年度 書誌調整連絡会議

平成22年11月19日、東京本館で「典拠コントロールの諸相—ウェブでの提供の課題を中心に」と題して平成22年度書誌調整連絡会議を開催した。典拠コントロールとは、図書館目録において同一の著作、著者、主題(件名、分類等)の書誌データを精確に探し出せるように、名称等の典拠データの管理を行うことである。書誌調整連絡会議は国内の書誌調整および書誌データの標準化を目的として開催するもので、今年で第11回を数える。

会議では、外部の研究者等から典拠コントロールに関する国内外の動向について報告があった。当館からは、平成22年6月に公開した件名典拠「Web NDL SH(国立国会図書館件名標目表)」について紹介し、今後は件名に加えて名称典拠をウェブ上で公開する準備を進めている旨を報告した。その後、今後の典拠コントロールの在り方について意見交換を行った。

会議の概要は、後日国立国会図書館ホームページ(<http://www.ndl.go.jp/>)>「図書館員の方へ」>「書誌データの作成および提供」>「書誌調整連絡会議」(<http://www.ndl.go.jp/jp/library/data/conference.html>)のページに掲載する。

法規の制定

【規程第3号】国立国会図書館職員苦情処理規程の一部を改正する規程

(平成22年12月6日制定)

国会職員対象の新たな人事評価制度の導入に伴い、苦情処理の対象となる不利益処分の範囲に降給を追加した。平成23年4月1日から施行される。

なお、この法規は、平成22年12月6日付けの官報に掲載されている。



お知らせ

■ 近代デジタルライブラリーで 児童書も利用できます

2月1日、「近代デジタルライブラリー」へ「児童書デジタルライブラリー」を統合し、国立国会図書館が所蔵する明治期、大正期の図書のうち著作権処理を行ったもの約17万3千冊のデジタル画像を、一般書・児童書*の区別なく利用できるようになります。

また、国立国会図書館の施設内では、著作権処理前の図書約7万6千冊（約5万7千タイトル）の提供を開始します。これにより「近代デジタルライブラリー」の館内での提供総数は、約46万8千冊（約34万9千タイトル）となります。

今後は、大正期から昭和前期に刊行された資料のさらなる充実を図る予定です。どうぞご利用ください。

*児童書は昭和30年頃までに刊行されたものを含む。

○URL <http://kindai.ndl.go.jp/>

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>)

>電子図書館>近代デジタルライブラリー

○お問い合わせ先

国立国会図書館関西館 電子図書館課資料電子化係

電子メール kindai1@ndl.go.jp

※「児童書デジタルライブラリー」へのリンク、ブックマークは「近代デジタルライブラリー」へご変更をお願いいたします。

お知らせ

■ 国際子ども図書館展示会 「日本の子どもの文学 —国際子ども図書館 所蔵資料で見る歩み」



漣山人【巖谷小波】著『こがね丸』
博文館 明治24（1891）年
（少年文学 第1編）
協力 博文館新社



『赤い鳥』4（6） 赤い鳥社
大正9（1920）年



佐藤暁著、若菜瑠絵
『だれも知らない小さな国』
講談社 昭和34（1959）年

国際子ども図書館は、2月19日から、展示会「日本の子どもの文学 —国際子ども図書館所蔵資料で見る歩み」を開催します。明治から現代までの時代を彩る代表的な児童文学作家・画家の作品のほか、子どもが児童文学に接する機会の一つである教科書に掲載された作品や童謡など、約270点を展示します。

日本の子どもの文学は、明治24（1891）年、子どもを意味する「少年」文学として刊行された、巖谷小波の『こがね丸』に始まると考えられています。大正7（1918）年には児童雑誌『赤い鳥』が創刊され、児童文学に大きな影響を与えました。戦後は、子どもを囲む現実を取り込んだ長編のファンタジーが児童文学に転機をもたらします。文学を通して子どもたちに何が届けられていったのか、さまざまな作品からたどっていきましょう。

この展示会は、半年ごとに「児童文学者コーナー」の作品を入れ替えながら、しばらくの間常設します。8月21日（日）までは石井桃子、その後、小川未明の作品をご紹介します。入場は無料です。

休館日 月曜日、国民の祝日・休日（こどもの日を除く）、

第3水曜日（資料整理休館日）、年末年始

開催時間 9:30～17:00

会場 国際子ども図書館 本のミュージアム（3階）

※会期中は、講演会など様々な催物を開催します。詳細は本誌のほかホームページ、メールマガジン等でお知らせします。

○お問い合わせ先

国立国会図書館国際子ども図書館 企画協力課

電話 03（3827）2053（代表）



お知らせ

■ 国際子ども図書館 春休み催物 「子どものための絵本と 音楽の会」

国際子ども図書館は、東京・春・音楽祭実行委員会との共催で、「子どものための絵本と音楽の会」を開催します。ヴァイオリンとチェロの演奏にあわせて、クロケット・ジョンソン作の絵本『はろどまほうのくにへ』の朗読を楽しむ会です。入場は無料です。

○日 時 3月27日（日）13:30～、15:00～の2回

○会 場 国際子ども図書館 3階ホール

○対 象 3歳～中学生およびその保護者
(原則として子ども1名につき保護者1名)
各回100名(申込多数の場合は抽選)

○お申込方法

往復はがきまたは電子メールに次の事項を明記の上、2月28日（月）までにお送りください（必着）。

①住所、②参加者および保護者の氏名（ふりがな）・年齢、③ご希望の時間

○お申込み・お問い合わせ先

東京・春・音楽祭実行委員会 イベント係

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町1-105 神保町三井ビルディング

電子メール event@tokyo-harusai.com

電話 03 (3296) 0600

URL <http://www.tokyo-harusai.com/>

お知らせ

■ 平成22年度 利用者アンケートの 結果を公表しました

国立国会図書館は、サービスの利用動向や利用者の満足度・要望を把握するために、来館利用者を対象としたアンケートと、遠隔利用者（電子図書館サービスや遠隔複写サービスなど来館せずに利用できるサービスの利用者）を対象としたアンケートを交互に隔年で実施しています。

平成22年度は、遠隔利用者に対するアンケートを実施しました。アンケートの実施対象、実施方法等は次のとおりです。ご協力くださった方々に厚く御礼申し上げます。平成22年度の利用者アンケートの結果は、ホームページでご覧になれます。アンケートの結果は、サービスの改善のために活用していきます。

種別	実施対象	実施期間	有効回答数	送付数(機関)	回収率
国立国会図書館 ホームページアンケート*1	遠隔利用者 (個人)	6/21～ 9/26	846	—	—
図書館アンケート*2	国内図書館・ 関係機関	7/16～ 8/13	853	1,194	71.4%

*1 ホームページにアンケート入力フォームを用意し、回答者が画面上で回答するように行ったもの。

*2 当館の登録利用者制度に登録している国内図書館・関係機関から無作為に抽出した1,194機関を対象に、郵送で行ったもの。

○URL http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/enquete2010_01.html

国立国会図書館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 国立国会図書館について
> 利用者アンケート > 平成22年度遠隔利用者アンケート結果

お知らせ

■ 関西館小展示（第7回）

「テレビジョン —アナログから デジタルへ—」

地上アナログテレビ放送は2011年7月までに終了し、デジタル放送に移行します。これにちなんで、関西館ではテレビをテーマとする小展示を開催します。

日本でテレビの研究開発が始まったのは大正時代のことです。それから現在に至るまで、研究者や技術者の創意工夫と試行錯誤によって、新しい放送技術や、より美しく見えるテレビが生み出されてきました。

今回の展示では、草創期のテレビ研究者の著作から最新の放送技術書まで、テレビに関する研究・技術開発の歩みをたどる資料をご紹介します。あわせて、各年代の代表的なテレビ番組を扱った資料や、テレビと国民生活に関する調査資料などを展示します。テレビが次第に日常生活に浸透していく様子がうかがえます。

多くの資料は実際に手にとってご覧いただけます。テレビが映し出してきた時代をふりかえってみませんか。

- 開催期間 2月17日（木）～3月15日（火）（日曜・祝日を除く）
- 開催時間 10:00～18:00
- 場 所 関西館 総合閲覧室
- 入 場 無料





お知らせ

■ 資料保存特別研修

「図書館・文書館に おけるマイクロフィルム・ 写真の取扱いと保存」

国立国会図書館は、国内の図書館・文書館等に在職する方を対象に、マイクロフィルムおよび写真（フィルムおよびプリント）の取扱いと長期保存に関する研修を次のとおり開催します。どうぞご参加ください。

○日 時 3月18日（金）14:00～17:00

○会 場 東京本館 新館大会議室

○内 容

(1) 国立国会図書館報告「マイクロ資料保存に係る国立国会図書館の取組」

報告者 村本聡子（収集書誌部資料保存課主査）

(2) 講演「マイクロフィルム・写真の取扱いと保存について」（仮題）

講師 黒木信宏氏（日本画像情報マネジメント協会検定試験委員会委員、
富士フィルム株式会社産業機材事業部テクニカルサポートグループ主任技師）

(3) 質疑応答・意見交換

○対 象 図書館・文書館等でマイクロフィルム・写真の保存・管理に携わる
実務者（定員50名）

○参 加 費 無料。ただし、旅費等は受講者の負担とします。

○お申込方法

次の事項を明記の上、電子メールまたはFAXで3月11日（金）までにお申し込みください。

①氏名、②所属機関、③所在地、④電話番号

○お申込み・お問い合わせ先

国立国会図書館 収集書誌部資料保存課保存企画係

電子メール film2011@ndl.go.jp

FAX 03（3581）3291

電話 03（3506）5219（直通）

お知らせ

■ 新刊案内 国立国会図書館の 編集・刊行物



レファレンス 719号 A4 98頁 月刊 1,050円 発売 日本図書館協会

- ・予算と法律との関係
- ・スマートグリッドの導入に向けた動きと我が国の課題
- ・移民統合における言語教育の役割
- ・米国商品先物取引委員会（CFTC）



カレントアウェアネス 306号 A4 22頁 季刊 420円 発売 日本図書館協会

- ・図書館と観光：その融合がもたらすもの
- ・JISCの3か年戦略2010-2012
- ・モンゴル国立図書館の現状と将来計画

<動向レビュー>

- ・高齢者向けの図書館サービス
- ・ウェブアーカイブの課題と海外の取組み

<研究文献レビュー>

- ・蔵書構成



NDL CD-ROM Line 点字図書・録音図書全国総合目録 2010年2号
(1980年以前～2010年9月収録) 年2回更新
年間契約価格42,000円、初年度のみ63,000円(検索ソフト込み)
発売 日本図書館協会
参加館は243館(国立国会図書館、86点字図書館、156公共図書館等)。
収録レコード456,311件。

入手のお問い合わせ

日本図書館協会

〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14 電話 03(3523)0812

新年のごあいさつ

今年の課題

国立国会図書館長 長尾 真



新年おめでとうございます。

世界の情勢は変化のスピードを増しています。複雑化した国政課題に対応するために、本年は国内外の調査研究機関・研究者との連携を強化することを通じて、国立国会図書館の特色ある調査を一層充実させていきたいと考えております。

また、本年は電子出版・流通、電子図書館化の流れがいよいよ本格化する年であると存じます。国立国会図書館における最大の課題の1つは、現在運用しているOPAC検索を含んだ図書館業務システムを全く新しいシステムに入れ替え、来年1月から運用開始することです。幸い準備やテストは順調に進んでおり、新しい時代の要求にこたえる情報探索システムを提供するなど、利用者の皆様

にご満足いただけるものになると思っております。

もう1つは電子納本制度の法制化であります。電子出版物が増加して来ている中で、これを本格的に収集・保存・活用するために国立国会図書館法を改正しなければなりません。昨年春に納本制度審議会の答申をいただき、それにしたがって出版社など関係者の合意を得ながら法制化作業を行い、来春の通常国会に提出・成立させるべく努力を始めております。日本の貴重な創作物を失わないよう、できるだけスピーディに進めたいと考えております。

なお、平成21年度補正予算による大規模デジタル化作業は順調に進んでおり、今年中には部分的に公開できるようになるでしょう。

今年もどうぞよろしく願い致します。

C O N T E N T S

- 02 Book of the month - from NDL collections
Kintaro kurabirakie
Celebrating the New Year and praying for children's success and health
- 04 New Year's talk with the Librarian of NDL
Mr. Kiichi Sumikawa, sculptor, Professor Emeritus and Advisor, Tokyo University of the Arts
Rediscover the Japanese power of culture
- 12 Essay on languages (1) Representation and pronunciation
- 14 World of early Japanese books
- 13 <Tidbits of information on NDL>
Every day with websites
- 26 <Books not commercially available>
○ *Eizo akaibu no noto*
- 27 <NDL News>
○ 29th mutual visit program in the National Library of China
○ Annual meeting between the Librarian of NDL and the Directors of the Branch Libraries in the Executive and Judicial Branches of the Government FY2010
○ FY2010 meeting between the Librarian of NDL and directors of university libraries
○ Conference on bibliographic control FY2010
○ Laws established
- 29 <Announcements>
○ Children's books also available on the Digital Library from the Meiji Era
○ Exhibition at the International Library of Children's Literature "Japanese Children's Literature: A History from the International Library of Children's Literature Collections"
○ Spring event of the International Library of Children's Literature "Picture Books and Music for Children"
○ Results of the user questionnaire survey FY 2010 now available on the NDL website
○ Preservation and conservation training program "How to handle and preserve microfilms and photographs in libraries and archives"
○ Small exhibition in the Kansai-kan (7)
"Television : Transition from Analog to Digital Broadcasting"
○ Book notice - Publications from NDL
- 36 New Year Greetings
Challenges for the New Year

国立国会図書館月報

平成 23 年 1 月号 (No.598)

発行所 国立国会図書館
編集責任者 山田敏之
〒100-8924 東京都千代田区永田町1-10-1
電話 03 (3581) 2331 (代表)
F A X 03 (3597) 5617
E-mail geppo@ndl.go.jp

平成 23 年 1 月 20 日発行 定価 525 円
(本体 500 円)

発売 社団法人日本図書館協会
〒104-0033 東京都中央区新川1-11-14
電話 03 (3523) 0812 (販売)
F A X 03 (3523) 0842
E-mail hanbai@jla.or.jp

印刷所 株式会社正文社印刷所

本誌に掲載した論文等のうち意見にわたる部分は、それぞれ筆者の個人的見解であることをお断りいたします。本誌に掲載された記事を全文または長文にわたり抜き取りして転載される場合には、事前に当館総務部総務課に連絡してください。本誌 517 号以降、PDF 版を当館ホームページ (<http://www.ndl.go.jp/>) > 「刊行物」 > 「国立国会図書館月報」でご覧いただけます。



岡本婦一作 「ウサギノオルスキ」
『コドモノクニ』13 (5) 東京社 1934.9 p. 5
27 × 38 cm
<請求記号 Z32-B158 >

国立国会図書館月報

平成23年1月20日発行 (毎月1回20日発行)
(1月号通巻598号)

発売：社団法人 日本図書館協会 定価 525 円 (本体 500 円)